

# ペットライフ

mail:bunka1@ma.kitanippon.co.jp



エル動物病院長  
(舟橋村)  
佐渡 啓樹

犬や猫にも突然、脳の血管に問題が生じて脳に障害を起す、いわゆる脳卒中と呼ばれる病気になることがあります。最近まで犬猫では非常にまれな病気と思われていましたが、実際は珍しい病気ではないと認識されるようになってきています。犬猫の脳卒中は血管が詰まって起る脳梗塞が多く、脳出血は一般的ではありません。人間に起る脳卒中の印象ほどには重症化しにくい傾向があります。元気がなくなる、力が入らない、水も食事も取らない、首を傾けたままになる、平衡感覚がなくな

## 犬と猫の脳卒中



脳梗塞から回復した高齢の猫。わずかな斜頸と、後ろ足に軽度の運動障害が残っている。

る、歩き方がぎこちない、すぐ転倒する、目の異常、行動パターンの変化、けいれん発作などの症状が突然現れます。通常は、最初に現れた症状が大きく変化せずに経過します。これらの症状が1日以内に自然治癒する一過性脳虚血発作というものもありますが、これはより深刻な問題を起す前触れである

## 基礎疾患あれば要注意

可能性があります。脳出血の症状は脳梗塞と同様か、より深刻で進行して死に至ることもあります。症状は脳卒中以外の神経疾患でも見られるものなので、血液検査、内分分泌検査などで基礎疾患がないかを確認し、高血圧やタンパク尿の有無、神経系の反応、普段の生活習慣、環境、発症した時の状況

いように抗血小板薬や降圧薬を投与することもあります。早期に治療が開始できれば、ほとんどの症例は一週間前後で徐々に症状が改善し始め、数週間治療を終えられます。後遺症は限定的です。基礎疾患があれば継続的な治療が必要です。脳卒中の主な危険因子は高血圧

から推定します。確定診断にはMRI検査が必要ですが、動物ではまだ一般的とは言えません。残念ながら犬猫の脳卒中に明確に有効と言える治療法はまだ確立されていません。多くの場合は発症時から飲食しない、あるいはできなことが問題となるので、脱水や栄養状態の悪化を防ぐために点滴などで支持療法を続けます。また、さらなる脳梗塞を起さな

と高コレステロール血症です。心臓病や腎臓病、肝機能障害、感染症の他、甲状腺や副腎の病気、糖尿病などの基礎疾患がある犬猫では要注意です。血圧が大きく変化しやすい寒い時期は特に危険で、基礎疾患がない動物も発症することがあります。夜から朝方の冷え込みや急激な温度変化には気を付けてください。また肥満と運動不足にも注意しましょう。